

SHOW HHEYシネマルーム

★★★

私はあなたのニグロではない

2016年/アメリカ・フランス・ベルギー・スイス映画
配給：マジックアワー/93分

2018 (平成30) 年5月16日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：ラウル・ベック
原作：ジェームズ・ボールドウィン
語り：サミュエル・L・ジャクソン
出演：ジェームズ・ボールドウィン
/キング牧師/マルコムX
/メドガー・エヴァース/シ
ドニー・ボウチエ/ボブ・デ
イラン/マーロン・ブランド
/ジョン・クロフォード/
ロバート・F・ケネディ/バ
ラク・オバマ

■ショートコメント■

◆本作は1960年代の公民権運動の中で活躍したマルコムXやキング牧師らの行動を追ったジェームズ・ボールドウィンの原稿をもとに、①50～60年代の公民権運動の時代②80年代の、映画のもとになった作品をボールドウィンが書いた時代そして、③ボールドウィン逝去から30年後、つまり2017年の本作を製作した時代の「黒人問題」を描くドキュメンタリー映画だ。

本作は、現在活躍する黒人俳優サミュエル・L・ジャクソンのナレーションと、各時代のニュース映像、そして各時代の映画から抜き取った映像で構成されている。したがって、そこには私も見たことがある有名なニュース映像やさまざまな映画の有名なシーンが登場してくるから、なるほど、なるほど……。しかし……。

◆何の予備知識もなく『マルコムX』(92年)を観た時の衝撃は大きかったし、近時観た『グローリーー ー明日への行進ー』(14年)でもキング牧師の偉業を改めてじっくり知ることができた(『シネマ36』162頁)。また、そこで私は次のように書いた。すなわち

■キング牧師の物語が、はじめて映画に！■

世界を動かした伝説的な黒人を主人公にした映画はたくさんある。ネルソン・マンデラを主人公にして描いた『マンデラの名もなき看守』(07年)(『シネマルーム20』146頁参照)や、マルコム・Xを主人公にして描いた『マルコムX』(92年)等だ。また、黒人奴隷をテーマにした永遠の名作は、ハリエット・ピーチャー・ストウの小説『アンクル・トムの小屋』(1852年)だが、映画でも『アミスタッド』(97年)(『シネマルーム1』43頁参照)、『それでも夜は明ける』(13年)(『シネマルーム32』10頁参照)、『大統領の執事の涙』(13年)(『シネマルーム32』152ページ参照)等の名作がある。黒人俳優のトップとなったデンゼル・ワシントン主演の映画『グローリーー』(89年)や、盲目の黒人歌手レイ・チャールズを主人公にして描いた『Ray/レイ』(04年)(『シネマルーム7』149

頁参照) も感動的だった。

このように、私は一本一本の映画を鑑賞することによってさまざまな黒人問題を学んできた。

◆それに対して、本作はなんともショッキングな『私はあなたのニグロではない』というタイトルで、マルコムXとキング牧師を中心とする、有名な「黒人オールスター」を登場させることによって、黒人問題の本質に迫ろうとするもの。本作冒頭のテレビ番組におけるボールドウィンのインタビューから始まるが、さすがに彼の問題提起は鋭い。「黒人の自由度が広がっている今、なぜあなたは黒人問題を問題にするのか」と主張する白人の老教授に対する、彼の反論や切り込み方はさすがだ。

しかし、私はマルコムXとキング牧師はその名前と実績をよく知っているが、残念ながらボールドウィンについてはその名前も顔も本作ではじめて知っただけ。つまり、彼は執筆業に忙しいあまり、「自らも運動に身を投じた」と書かれているけれども、実践でのリーダーとしての役割はあまり果たせていなかったのでは・・・？

◆本作の監督は『マルクス・エンゲルス』(17年)の監督をしたラウル・ペックだと知ってびっくり。同作は史実を踏まえながら若き日のマルクスとエンゲルスの「ある時代」を切りとった「青春もの」として面白かったが、そこでは2人の理論面と実践面両者での活動の素晴らしさが目立っていた。それに比べると、本作のスクリーン上に最もよく登場するボールドウィンはしゃべるだけで、マルコムXやキング牧師と同じような行動力を見せていないため、テレビ番組における彼の主張には納得できても、その影響力の大きさはイマイチ・・・？私はそう思わざるをえない。

オバマ大統領の登場や、「昨年はホワイト！今年はブラック！」といわれたアメリカの第89回アカデミー賞における『ムーンライト』(16年)の作品賞、脚色賞、助演男優賞の受賞等(『シネマルーム40』10頁)は画期的なことだったが、アメリカには深刻な黒人問題が今なお内在していることは間違いない。そんな時代に、ボールドウィン監督が本作を監督し公開したことには拍手だが、その出来はイマイチ。とりわけ、『マルクス・エンゲルス』に比べるとその出来は段違いだ。

◆本作はネット上でさまざまな評論がされているが、藤原帰一氏(東大政治学者)の評論は(2018年5月13日 藤原帰一の映画愛)面白いので、要注目！

2018(平成30)年5月23日記